

JPC NEWS VOL.7

Japan Pentecostal Council

Japan Pentecostal Council News
2010.06

日本ペンテコステ協議会
【事務局】

日本アッセンブリー・オブ・ゴッド教団本部内
〒170-0003 東京都豊島区駒込 3-15-20
TEL.03-3918-5935 FAX.03-3918-0474

「権勢によらず、 能力によらず、 わたしの靈によって」

(ゼカリヤ書 4章6節)

特集

『21世紀の最初の10年から学んだ事、
これから10年に向けての展望』

「綻を深め、拡大する」

新代表あいさつ

日本ペンテコステ協議会
議長 細井 真



「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建たられるのです。」エバソ書4章16節

昨年、私たちは今まで想像することもできなかつたカトリックを含めた全プロテスタンントの大会を持ちました。それは様々な違いを乗り越えての主への感謝の集いであつたと思います。私たちが主に期待し、主に願わなければならぬことは、この交わりをさらに継続することにあると思います。自身の信仰を確認しつつ、互いを受け入れ合うことを通して神の愛の麗しさが世に示されるのではないかでしょうか。

一方、私たちの属する協議会に主が望まれていることは何でしょうか。それは交わりの拡大です。できる限り不要な部分を削ぎ落として、門戸をより広く開け放ち縛の拡大を図りたいのです。また、すでにメンバーである諸先生、諸教会、諸教団との協力関係を深める必要があります。私たちが直面している社会は非常に険しい状況です。たった一人で、「教会で、一つの教団で対応していくには、いくつもあるハードルを越えて行くことができません。私たちの主は、聖靈さまをお送りくださっていますが、兄弟姉妹、兄弟教会、兄弟教団を与えてくださっています。互いに謙遜に学び合い、助け合い、祈り合つて神の御国を建設していきましょう。」

アッセンブリー教団の展望とプログラム



日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団

細井 真

1949年に設立された当教団は、1999年に50周年を迎えた。この年の年11月には次世紀へのビジョンとして、「アッセンブリー21」—継承と前進—を発表し、21世紀を迎えた。

2010年を迎える、21世紀の最初の10年が経過しようとしている。数字的には、1999年には、教会・伝道所は208だったのが、2008年には211に、信徒数は、9626人が10766人になった。教会数は、微増であるが、信徒数は1100人の増加となった。教会については、新しく開設・加入する教会がある一方、やむなく閉鎖しなければならなかった教会もあった。

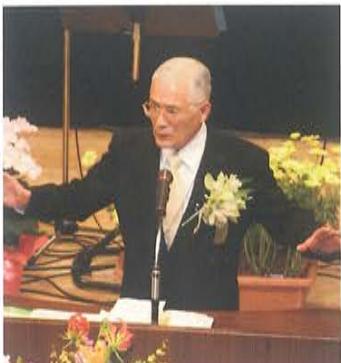
1986年に教団を挙げた13ヶ年計画「アッセンブリー1999」がスタートし、250の教会伝道所と20000人の信徒を目標に宣教活動を継続してきた。結果1986年と1999年で比較すると、教会伝道所数は、147から208に、信徒数は、6778人から9626人に増加した。また、日本の全都道府県に教会伝道所を開設することも出来た。だが、1999年以降の10年間は、それまでの期間よりも、増加がゆるやかになった。

いくつか考えられる要因として、教職の高齢化、後継者不足、受靈者の減少に加え、不況により献金額が減少したこと等が挙げられる。その間も、全国レベルの大会や教区聖会において、フルタイム献身者の必要が訴えられ、主の招きに応じて献身者が与えられてきた。毎年、中央聖書神学校を卒業した先生方が、伝道の第一線に立って行くが、入学生の減少に加え、近年は牧師の子弟あるいは当該教会から後継者になるべく献身する神学生が全神学生に占める割合が上がっており、出身教会以外の教会に派遣できる絶対数が不足する事態となり、引退を希望している教職に引退を先延ばししてもらっている状況である。新規の開拓伝道に神学校卒業生に従事して頂くことが困難になってきている。財政的には、2000年に教団本部・神学校改築事業で借り入れた分について、順調に返済を履行してはいるが、教団内の局・部・委員会、既存教会伝道所への援助などは十分とは言えない現状になっている。

今後の教団運営において、各教会の後継者を含んだ献身者の獲得が大きな課題の一つになるが、中央聖書神学校での伝道者資格取得に加え、より多くの献身者の獲得を目指し、一昨年からは、同神学校に通信制を開設し、全国で伝道者になる学びをスタートさせている。さらに、同神学校卒業以外での教職資格取得制度を充実させ、また、教団が教会独自の教師やスタッフを認定することも視野に入れた底辺の拡大が検討されている。

当教団では、今後の教団運営の指針として「アッセンブリー21」を更新した「リノベート・アッセンブリー21」を策定し、実施しようとしている。その中では「権勢によらず、能力によらず、わたしの靈によるのである」のみことばに従い、宣教力強化につとめていくための組織にしていくこと。また、教会の主体性を重視した伝道・牧会を支援し、教団全体の宣教面での働きに信徒を登用していくこと等が検討されている。ともすれば、教団が拡大していくに伴い、教団人としてのアイデンティ

ティが薄れていく可能性があるが、教職同士の交流、数年に1回開催される全国レベルの大会や毎年行われる教区レベルの聖会、さまざまな宣教協力ネットワーク等を通しての教職・信徒相互の信仰を励まし、主の前に一致して前進する教団でありたいと願っている。



さらなる増殖に向かって

日本フォースクエア福音教団 佐藤成紀

2000年からの10年間は、私たち日本フォースクエア福音教団にとって、「重心シフト」の10年間でした。きっかけとなったのは、2000年のフォースクエア日本宣教50周年を期に新内規が採択され、教団運営の方法が一新されたことです。

それまで当教団の運営は、理事会の自由裁量に基づく決定に重きが置かれていました。ペンテコステの信仰に基づいた前例のない宣教活動を手探り状態で進めていく上では、特に宣教初期の段階において、教団指導部の自由裁量権は有効だったかもしれません。しかし、教団が歴史を重ねるとともに新たな教会や教職者たちが次第に増加し、教団運営のルールを明文化する必要が生じてきました。新しくフォースクエアに加わった人たちから見ると、不文律による教団運営は非常に分かりにくいものであり、適切なコミュニケーションが欠落すると教団指導者層への不信感につながりかねない危険性があったからです。

新内規により、理事会や教団役職者の責任と権限が明らかになり、教職者や教会の認定基準も明確化されました。その結果、教団内の風通しが良くなり、日本人以外の教職者や外国人の集う教会が加わりやすい環境が整備されました。10年前は北部（北海道・青森）、関東、南部（鹿児島・沖縄）の3教区25教会でしたが、現在は中部（長野・山梨・静岡）と関西にも教会が開拓され、5教



区40教会となっています。日本宣教に重荷を持つアメリカ人、フィリピン人、ブラジル人、韓国人、イギリス人などが教職に加わり、国際色豊かな「家族」を形成しています。

10年後の2020年に向けて、私たちはさらに新しい教会を生み出して行きたいと願っています。私たちの今後の方向を考えるため、例えば、関西教区を一つのモデルとして取り上げてみましょう。関西に初めてフォースクエアの教会が生まれたのは、1999年でした。ハワイのホープチャペル、ラルフ・モア牧師の下で訓練を受けたジェフ・マッケイ牧師が来日し、大阪の中心部で教会を開拓しました。そして、その教会に集ったリーダーたちが、次々に新しい教会を開拓し始めたのです。11年前にはただ一つの開拓教会しか存在しなかった関西に、現在フォースクエアの教会は6つあります。そのうち最も新しい教会は、韓国人の宣教師が開拓した教会から送り出されたイギリス人牧師によって始められました。牧師が牧師を生み、教会が教会を生み出すという方法により、新しい教会が増え広がってきています。

エルサレムに誕生した教会は、ローマ帝国内における教会開拓の働きをすべて中央集権的に計画・管理していたわけではありませんでした。またアンテオケ教会が宣教チームを送り出した時も、エルサレム教会指導部の指令によって異邦人教会開拓に乗り出したわけではありません。もちろん当時は迫害の中にあり、通信や移動手段の制約もありましたが、一つの重要な原則をここに見ることができます。つまり教会開拓は、聖霊のリーダーシップに従い召しと賜物に応じて、言わば「現場の裁量」中心で進められたのであり、「会議室」の決定によりトップダウンで推進されたのではないという原則です。

2000年の教団内規採択により、会議室から現場へと重心がシフトし、さまざまな権限が委譲され、現場の裁量に基づく教会開拓が促進される結果となりました。10年後、20年後に向けて、私たちはこの「宣教現場重視」の姿勢を貫き、聖霊の導きに従って牧師が牧師を育て、教会が教会を生み出す働きにさらに注力していきたいと願い求めています。主の力ある増殖のみわざに期待します。



2009. 教団大会



神の家族キリスト教会のこれから展望



神の家族キリスト教会
代表役員 水野明廣

イエス・キリストに対する信仰が一層強くなりながら、一方では信仰の家族として互いに愛し合い、支えあう群れとして拡大し、キリストの聖名があがめられるためという目的のために、キリストの福音宣教をより強力に推進できる信仰の家族でありたい。

特に、これから将来の特徴は、キリストの性格であるガラテヤ人への手紙5章22-23節の「御靈の実」をならせながら、第一コリント人への手紙12章7-11節の、「御靈の務めに伴う御靈の賜物の表れ」を期待し、まさに見えるキリストの体である教会にならせていただきたい。

なぜなら、今は、「・・・イエス様にお目にかかりたい・・・」(ヨハネ12:21)と、人々のイエス様への関心がますます強くなり、求めている時代だからです。

本体はキリストにあるのです。コロサイ人への手紙2章17節にあるように、キリストに人々を結びつける神の家族であるようにと願い祈ります。

「取り組んできた事、さらに進めるべき働きについて」

ニューライフチャーチ 原チャペル
牧師 吉田三喜夫



[聖書学校]

1975年に、この名古屋で聖徒を整え、主の奉仕に用いられる器を育てる働きが始りました。週3日の3年間の授業でした。他の聖書学校、(生駒聖書学院、カナダのエストンの聖書学校)に行く人もありましたが、名古屋福音聖書学校は始ったのです。35年間の中で卒業生は75名を数え、卒業生達は、母教会で牧師を助け、ある者は開拓し、主の働きを広げています。2007年9月には、分校も誕生し、今年度5名が卒業予定です。整えられたリーダー達は、家の教会、セルチャーチ、ホームチャーチ呼び方は違っても、使徒時代の様に集まりの中で、人々に福音を伝えています。

この聖書学校の働きを通し、教役者19名が生まれ、主の弟子が数多く育ち、教会の土台となっている。また、これまで数多くの聖靈に関する良書を輩出してきた「生ける水の川」の働きも忘れてはならない。今この働きを、祈り支える教団、教会、聖徒の方が与えられる事を願ってやまない。生きた証を数多く聞き知る事は私達の信仰生活の大きな助けになるからだ。

[貧しい人々への働き]

ハート・フォー・ザ・ワールドジャパン

貧しい人に目を向けて直接働きかける(イザヤ58:7、飢えた者にパンを分け与え、・・・貧しい人々を家に入れ、・・・)

これに着せ、・・・世話をする事ではないか。)と、聖書が語る様に、デル・ウォーカー師が始められたこの働きを応援しています。お金や物資の支援だけに終わらず、教会を生み出し、魂の救いに力を入れています。バザーや資源回収など行ない活動を広く知つてもらおうと努めています。フィリピン、ザンビアに直接物資を持って若者とスタディーツアーにも行きます。次の時代を担う者が、靈的成長や見聞を広め、福音を伝える喜びを味わう訓練として用いられています。

又、私達は一人ではなく、多くのクリスチヤンの支えを感じられる体験の時ともなっています。



ホームレス伝道の働き

10年以上前からホームレスの人々に重荷が与えられ、毎礼拝後、名古屋駅近くで、200個以上のおにぎりを配り、神の言葉が届けられています。その中から、受洗者、結婚する人、就職者、とおこされています。又、他の教会でも、ホームレスの人がアパートに入居できるよう助けています。20年以上橋の下で生活していた76才の老人は1年半区役所に働きかけ入居出来ました。これで畠の上で死ねるといって、早1年が経ちました。



[ママと幼児に対する働き]

0～3才頃までの、未就園児とママ達が信者・未信者を問わず週1回定期的に教会に集い、子育て中の親子に、憩いと交わりの場を提供している。

「ベビー＆ミー」「ママランチ」「mama's サロン」と、名前は様々だが働きは教団内に広がって、親子で交わりを楽しんでいます。家族の話から始まり、聖書の話に、時には英語を学び、ランチと共にしていく中で、悩みの解決や教会に導かれる方も出てきています。

幼い魂が、健全に育つ環境を整える事は、教会の大きな働きであり、一人一人が使命感を感じ、働き人が増し加えられ、家族の救いに導かれるよう更に働きを進めていきたいと願っています。

「ゆりかごから天国まで」ではないが、今まで以上にこれからの中10年は、主の御名をあがめ、主の業を成し、人々を守り助け、主と共に喜びを味わえる、働きをさらに進めていきたい。使徒の働き2章47節に「・・・すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」とあるように、この意識を持ってクリスチヤンライフを歩んでくれる事を願います。

日本チャーチオブゴッド教団 今後の展望とプログラム

日本チャーチオブゴッド教団 監督 八束 和心

主の御名に心から感謝と賛美を捧げます。過去10年を振り返ると、まことに遅々たる歩みですが、ここまで導かれたのは、ただひとえに神の恵みによるものと感謝に堪えません。また、教団各教会の先生方と忠実な多くの兄弟姉妹の尊いご協力とご奉仕のゆえに、心からの感謝を申し上げます。

第一に、過去約10年以内に、新規開拓、教会堂建設、そして移転や復興など、教団8教会に新しい会堂が備えられました。教団として40年を超える歩みの中で老朽化し、成長と共に手狭になった諸教会に、主は新しい会堂を与えてくださいました。第二に、各教会において土台を築く為に労苦してくださった兄弟姉妹の子弟が数多く育成され、教会の働き人として成長していることも感謝に堪えません。そして、これら次世代の働き人を中心には、ユース伝道やゴスペルクワイアなどの働きを通しての新しい魂が導かれております。第三に、各教会の牧師達が海外宣教への重荷を持ち、それぞれ中国・北朝鮮、ルーマニア、フィリピン等への宣教師達を支援すると共に、教団各教会からチームを率いて宣教地へと出て行くようになったのもこの10年間において現された主の恵みとして感謝しております。

今後10年間を展望すると、プロテスタント宣教150年を迎えた現在、未だに打ち破られない日本宣教の状況を思う時、私たちはヨシュアのように「私と私の家族とは主に仕える。(ヨシュア24章15節)」と立ち上がって主の業に励まねばなりません。そして、教団牧師会メンバーの多くが高齢化している現状を見ると、私たちの後に続く世代へ信仰と使命を継承することが最重要課題と考えます。その為に、教団としては、各教会での弟子訓練プログラムを実施することと、教団として聖書学校を設立するビジョンに向け前向きに取り組んでおります。

現在、数名の若手教職がプロジェクトを立ち上げ、月に2~3回程度集まり、弟子訓練と次世代リーダー育成について祈り合い、話し合っています。プロジェクトでは、各教会で用いる①受洗前後基本教理コース、②クリスチャンライフコース、そして、③リーダーシップコースのテキストを準備しています。これら教団共通のテキストを制作し、各教会の牧師とリーダーの指導の下、キリストの身体なる教会を建て上げる健全なチャーチビルダーとリーダーを育成します。そして、各教会でこれらのコースを終えた人を対象に、更に専門的な学びを実施する聖書学校を準備する予定です。

教団の聖書学校は、1977年に諸般の事情により閉鎖され、それ以降各教会において牧師の指導により弟子訓練がなされ、また、多くの働き人が他教団の聖書学校や教団他国の神学校で学びました。現在、「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、働き手を送ってくださいるように祈りなさい。(マタイ9章37~38節)」との御言葉に励まされ、もう一度「ハーベスト&トレーニングセンター」というビジョンを持ち、教団の聖書学校設立を願っております。本部教会である東京ライトハウスチャーチでは、2005年より教会内聖書学校をスタートし、ISOM(International School of



Ministry) のビデオ講義を中心に、不足部分を独自講義で補いながら学びを進めています。この教会内聖書学校の独自講義で教団他教会の教職にも教鞭を執っていただきしており、将来の教団の聖書学校の方向性を探っております。

私たち小さな群れを通しても主は恵みを豊かに現してくださると信じ、主の圧倒的な訪れる時が近いこのとき、大収穫の時に用いられる器を用意する教団でありたいと願っております。



成人式



2009年夏キャンプ

日本オープンバイブル教団これからの10年展望



日本オープンバイブル教団
教団代表 菅原 亘

プロテstant日本宣教 150 年記念関連もすべてのプログラム、イベントも祝福の中で終わろうとしています。気持ちを新たにして次の 200 年に向かって行こうと思っています。200 年記念には私個人としては既に天国に入籍していると思いますが、これからの中 10 年であれば、神の御心ならば元気に第一線でミニストリーを展開している年齢かと思います。時代の変化が早いので政治的、経済的環境の激変により私たちの生活も激変が予測されます。どんな変化にも対応できるフレキシブルで柔軟な思考を持ちながら時代に対応しなくてはいけません。福音のメッセージはいつまでも変わることはできませんが、福音をどのように伝えるかの手法や福音に対する聞き手の変化について対策を立てて行かなければなりません。世俗化の波がいつの時代にも教会に押し寄せています。それがますます強く教会に迫っています。個々の教会の戦いは世俗化への対抗の戦いとなることでしょう。人々を教会に招くための企画も表面的には福音を前面的に出すことをしません。福音を音楽コンサートに包むとか映画会に包むとか、文化教室の後ろに潜めておくとかいろいろと戦術を駆使しています。これらのこととも知恵ある方法だと思います。しかし使徒の時代を見ていると福音一本で勝負している戦術は私たちに本来の姿に目覚めさせるものです。福

音を大胆にストレートに語ることから、少し柔らかく（人間的に）接点を持つとするのですが、結果的に長いアプローチによる時間的経過とともに信仰の勧めのタイミングが計れなくなってしまうことが多いのです。仲良くなり過ぎると逆に信仰を勧めるタイミングを無くしてしまうのです。イエス様に信仰の従順を迫るにはタイミングが大切ですね。これからの中10年はIT時代の進歩により情報の混乱、偽情報、などが錯綜し、教会もこれらの情報戦争に巻き込まれることも起こります。あの教会は本当に安心できる教会なのか？など悪質な情報との戦いともなります。そしてNetwork化されて、情報に囲まれひとりの人間が大勢の人に悪質な影響を与えることも可能となります。正しい聖書の知識、神学、健全な人格訓練プログラム、健全な靈的成長プログラムなどが、キリスト教界全体で取り組まなければならない課題が出て来ると予測されます。

これからの中10年は凄い勢いで福音が前進することでしょう。また悪質な間違った福音も世に出て来ます。何が本物か分からなくさせるサタンの戦術に惑わされることなく、いつも神様との関係を密にして謙虚に指導者たちが手を取り合い、情報を共有し、悪魔に立ち向かう10年です。10年後には日本の人口の5%がキリスト者になることを願い夢見て行きたいと思います。これからは使徒時代の再来の時代です。世俗化の津波を押し返す聖霊の力こそ宣教の原点です。

また教団ごとの区分けも失せて行くことでしょう。ある農家の庭で池の中にアヒルを飼っていました。ある日から大雨が降り始め何日も降り続けました。

やがて水は池を境界を越え、道路の境界を越え、隣家の境界も越えて行きました。隣家との境界も判別できなくなりました。それぞれの農家のアヒルはひとつになって大水の中で泳ぐようになりました。今は何となく引かれている教団の境界も大きなりバイバアルの中では境目も無くなり、ひとつの群れとなるのかも知れませんね。シャローム！

からの10年は世俗化との激しい戦い、使徒時代の再現の10年だと思います。

これまでの歩みと今後の展望

シオン宣教団
監督 松本 光弘

この10年間の教団の歩みは、本来の教団としての在り方を探る歩みでありました。教団とは共にイベントを作り上げるだけの存在ではないと思われました。私達は毎年、教団を挙げて聖会を企画し、特別講師をお招きして、各教会の成長と福音の前進に取り組んで参りました。また次代の教団を担うべく、若者のためのユースキャンプも積極的に取り組んできましたが、教団とは果たして単にイベントを企画・実施するだけのものなのかと疑問に直面したのです。年に3回開かれる牧師会のほとんどの時間は聖会とユースの企画に追われる始末。もし、聖会やキャンプがなければ教団の存在意義は一体どこにあるのかと考えさせられました。そして、イベントとはそれ自体が目的ではなく、主イエス様の御心を実践する手段であることをいまさらながら痛感したのです。また、ややもすると何か世の中の競争意識の延長線上に置かれ、互いの教勢



を比較し合う場と化していたのかも知れません。

一昨年の秋より教団の体質が変化しつつあります。教団の中にいのちの躍動が感じられるようになりました。同じように年に一度の聖会を行なっていますが、聖会の実施が目的ではなく、各教会、信徒一人ひとりの成長に重きを置くことが浸透し、実質的な力と変わってきたのです。特にユースキャンプに革命が起こりました。これまで牧師たちが主導で進めて参りました。何年続いて来ることでしょう。しかし、昨夏のユースキャンプは、一年前から各教会のユースリーダーが打ち合わせを重ね、ユースたちのユースたちによるユースたちのためのキャンプが正に実現したのです。そのキャンプで監督である私がしたこととは最後のお祈りだけだったのです。現在も彼らは一ヶ月に一度は集まり（遠方の者はメールで情報交換）、今年8月に予定されているキャンプの企画を進めています。

これから10年の展望は、この終わりの時代の日本のリバイバルにお役に立つ群れとして用いて頂きたいと言うことです。そのために新たな教会を次々と生み出す群れになりたいと願っています。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」と語られるように現状の教会に満足することなく、福音を携えて遣わされる群れを目指します。

そのためには献身者の育成が急務です。収穫の主に祈り、教団としてもビジョンを打ち出し、可能な限りサポートして、働き人が起こされる環境を整えて行きます。

さらに、教会間の実質的な交流、協力体制を益々強固なものにして、互いに協力し合う体制を整えたいと思っております。教団内の講壇交換はもとより、各世代のメンバーが交わり、結びつきを強めることによって教団意識が醸成され、自分の属する教会のみならず、教団全体がキリストの身体であるという認識を持ち、祈ることができれば何とすばらしいことでしょうか。各個教会の独自性を尊重しつつも、協力できるところは犠牲を払って協力し、全体として宣教の拡大を図るもので、形や形式だけの教団ではなく、キリストの御体の大切な部分を担うものとして、終わりの時代を切り開いて行きたいと考えております。

小さな群れの教団ではありますが、お祈りに覚えて頂ければ感謝です。よろしくお願ひいたします。今後の数値的目標は次の通りです。

	信徒数	教職者数	礼拝出席	教会数
現在	266人	9人	189人	5
2年後	357人	14人	260人	6
7年後	630人	19人	500人	8

《2009年11月 教団内牧師会にて設定》



2009年8月
教団主催のユースキャンプ

21世紀の最初の十年から学んだこと、これからの十年に向けての展望

イエス・キリスト福音の群れ
代表 永井信義

21世紀の最初の十年の出来事としてまず挙げられるのが、イエス・キリスト福音の群を母体として設立された神学校、拡大宣教学院が2009年に20周年を迎えたことです。日本ペンテコステ協議会に属する教団、教会からも神学生がこれまで送られるなど、さまざまな形でのご支援をいただいていますこと、心より感謝しています。地方にある、それも教会の無い地域を数多く抱える東北地方に置かれた神学校として、その歩みをさらに確かなものとする歩みをこれからも目指していきたいと願っております。引き続き、ご加構のほど、よろしくお願ひいたします。



東北、関西、九州に主だった教会が位置する私たちの群ですが、地域により根差した教会形成が求められる中、従来の伝道スタイルに加え、関係づくりを土台として方法（例えは、アルファ・コース）が試されるなど、効果的な伝道のあり方を模索する必要性を痛感する十年であったと言えるでしょう。

2012年に母教会である茨木キリスト福音教会の創立50周年に合わせて、福音の群もその50年の歩みを振り返り、将来へのヴィジョンを分かち合う時を計画しております。現在の15教会が開拓教会を生み出します20教会へと成長することを目指し、さらに大胆に福音宣教の働きに励みたいと願っております。

創立の当初から「受けるよりは与えるほうが幸いである」をそのすべての働きの基として進んできましたが、より一層、この主イエスの言葉に押し出されて、力強く歩んでいきたいと決意を新たにしています。

TPKF…過去10年から学んだこと、これからの10年の展望

単立ペンテコステ教会フェローシップ
代表 中見 透



TPKFのほとんどの教会が宣教師によって開拓され今日の教会の土台が築かれています。母国を離れ、一人でも多くの人が救われることを願って祈り、捧げ、日本を愛して仕えてこられた宣教師の救靈の情熱は今もなお教会形成の底に流れています。その源流は1906年のアズサ通りの聖靈の傾注に伴うリババイバルの流れです。その火は北欧に飛び火し、近隣の諸国、諸教会の靈性を刷新していきました。その北欧から宣教師が来日されたわけです。しかし、2000年以降のTPKFの現状を見ると、宣教師は次第に日本人に教会の責任を委ねて母国へと帰国し、教勢は停滞気味であり、教会数も増えていません。今までと同じように伝道し、礼拝を捧げ、聖靈の力を求め、TPKF全国大会を通して主からの励ましを頂いてきました。このままもう10年は走り続けることは

できるかもしれません、何もしなければ先細りは目に見えていました。教会形成におけるリーダーシップのパラダイムシフトを願ってハガイセミナーを開き、討議を重ねリーダーの意識改革に取り組んできました。ここ4年間は今までのTPKFの信仰遺産を確認し、感謝と共に反省をすべき点反省し、2009年「TPKFの将来を検証する」レジメを発表し、TPKFの現実と向き合う作業をしてきました。ヘンドリー・クレマー博士の提言は大きなチャレンジとなりました。(1961年2月20日発行日本基督教団宣教研究所「革新される教会」)そして、TPKF同僚者への具体的な方法の問い合わせがなされました。

1) 牧師が複数教会で説教応援ができるか

礼拝の時間を調整し、複数の教会をかけ持ちする。(21名が他教会への応援を承諾)

2) 教会役員研修会の必要性

すでに関西では研修会が開かれ、役員の意識が変わりつつある。信徒リーダーの育成が求められている。

3) 次世代への継承をどうするか

若者が、早急に起こされなければならない。この為に祈り、各地区の若者のリーダーを育成し、活動を積極的に応援する。

リサーチによれば教職者、信徒の平均年齢は高く、リーダーの世代交代がスムーズではなく、若者が教会に育っていません。ここ5年内に進むべき方向を決めなければ、閉じる教会も出てくる可能性があります。共に一致して、主からの展望と行動する力をいただかなければならぬと感じました。リーダーも教会もパラダイムシフトを必要としており、将来に向けての希望ある継続的な教会形成は、教会間の相互協力が重要な鍵であり、より強力なフェローシップが必要となっていることが認識されつつあります。

今年に入り、「TPKFアンケート調査結果報告」がなされました。そして、各リーダーに教会形成4つの視点のチャレンジがされています。

1. 未信者をどのように教会に取り込むか、(交わり)

未信者との接点、教会、家庭、職場、仕事の中で新しい人とかかわるには?

2. その人を教会の奉仕にどう取り組むか (奉仕)

洗礼を受けた人が何故教会に残らないのか?

3. キリストに似たものとなるためにどのように教育するか (弟子化)

弟子としていくシステムがあるか

4. 訓練した人をどのように遣わすか (宣教)

他の人を導けるクリスチヤンにするには、

「今、万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの現状をよく考えよ。」(ハガイ書1:5)

リババアルに備えて諸教会が一致し、次世代への継承を整える準備を主からいただいている機会としてこれから約10年をとらえています。さらなる聖靈の油そぞぎを主に期待してやみません。



TPKF教職者数84名、教会・伝道所数65教会(TPKF教会・教職者名簿より2009年1月発行)。教職者年齢20-30歳代8名、40歳代8名、50歳代29名、60歳代18名、70歳代16名、80歳以上5名。

限りなき可能性へのチャレンジ



日本ペンテコステ教団

代表役員 榮義之

10年一昔と言いますが、現代は一年一昔というぐらい時代は変化しています。残念ながら教団は、10年一昔どころか、30年一昔という状態と言っても過言ではありません。

現在は15教会で教団を形成し、新教会堂の建設も、礼拝出席倍増の教会もなく、逆に後継牧師もなく閉鎖や、経済的な理由で閉じた伝道所もあります。

過去10年間、各教会それぞれに祝福も多くありましたが、大きく飛躍していない状況で2010年を迎え、総会での総括で新たな挑戦を決意しました。

第一に、伝道活動へのチャレンジです。日本（伝道牧会地域）はまだ未伝地であると自覚し、「恐れないで、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから」（使徒18:9-10）の、みことばに励まされ、牧師と信徒が二人三脚で、福音を伝え、決心と受洗へ導き、責任ある教会員増を目指します。アーメンと言えば救われる！

第二に、すべての業はみことばと聖靈のお働きでなされることを再確認し、聖靈の満たされた教会として、聖書教育の充実を図ります。時代の状況が変化し、聖書的でないような風潮が多くなりつつある終末の時代に、健全なキリスト教会として前進して行きます。

第三に、教団財政の確立を目指し、什一の什一を納入し、献身者養成や牧会伝道支援、新会堂建設推進を目指します。

第四に、生駒聖書学院は全国の教会に開かれており、現在はペンテコステ教会だけでなくカリスマ系教会、福音派、日本キリスト教団やバプテスト教会、韓国系教会、単立教会、カトリック教会など聖靈に飢え渴き、聖靈の力を求める献身者を大勢迎え、日本のリバイバルと世界宣教の器を養成しています。可能性へ挑戦が可能になる信仰の牧師が全国で活躍中です。これからも全国の教会へ仕えて参ります。ぜひ、献身者を送りください。



第五に、各教会それぞれの個性を生かしたバラエティある教団としての前進を願っています。

年間365日給食伝道や脱北者救援活動の大坂救靈会館。アンサンブル・オーケストラ活動で地域浸透中の富雄キリスト教会。覚せい剤やアルコール依存症、暴走族等に悩む家族を含めた救援活動に取り組むアドラムキリスト教会。開拓伝道開始以来7年間50日間連続伝道に取り組むJZS、キリ

スト教会。家族伝道と商店街とのタイアップで安定した活動の花園キリスト教会。夜中に繁華街で聞き屋を夫婦で開き、行列ができるほど人気の四日市信頼教会。365日インターネット礼拝やプロブ、テレフォンメッセージ、ラジオ放送やテレビ出演などメディア宣教、さらにアフリカ宣教継続のエリムキリスト教会。各教会それぞれがあらゆる可能性へ向かってチャレンジし、祈りとともに、愛と理解と協力の中で、マラナ・タ！主よ、来てください。と再臨を待ち望みながら前進していく日本ペンテコステ教団です。

「小さな群れよ。恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです」（ルカ 12：32）

21世紀の最初の10年から学んだ事、これからの中10年に向けての展望



日本ネクスト・タウンズ・ミッション
代表 三坂 正治

聖靈宣教東京大会、プロテstant宣教150周年記念大会、エジンバラ宣教大会等の委員会に出席する事により、歴史また今日に於ける世界のキリスト教界の進展を知る機会となった。講師として来日される方々が地方教会に訪れてくださることもまた大きな祝福となり、健全な風通しをもたらしている感あり。

ネクスト・タウンズ・ミッションにおいては、過去10年の間に献堂式（加古川、岡山、春日井、日進、東大阪、奈良）があり、牧師および伝道師任命に加え、移籍による新加盟者があった。人事においては、まもなく百歳を迎えるとする岡田千代子師の御國への凱旋、分団（ぶんけつ）による増殖、高齢化に伴う健康問題も少なからずあった。

昨秋、「若者に油注ぎを」のテーマのもと、社会人として活躍している牧師子弟方を迎えての修養会を行なった。参加者は喜びと力に満たされて、「次回にはもっと仲間を誘って出席したい」という願いが起こされたようである。この事はこれからの中10年間に向けて、信仰継承の課題の一つとして取り組んでいきたい。次世代への備えとして、器の育成、世界宣教の実践を目標とする。

福祉、および宣教においては、松阪福音教会（藤田光康師）「スウェーデンホーム」の働きが軌道に乗り、竹内宣雄師は働きを、今年度より、インターナショナルチャーチから独立して、主のご命令である宣教活動にまい進することになった。



「ラブ・アジア・ミッション」代表 竹内宣雄 宣教師

ハレルヤ！主の御名を賛美します。みなさまのお祈りとご支援を心から感謝します。

このたび、「ラブ・アジア・ミッション」はインタナショナルチャーチから独立しもっと多くの教会に仕える宣教団体として新しく出発することになりました。

これからは、今まで行つきました、「バック・トゥ・エルサレム運動」を推進するため、中国国内での弟子育成・宣教師養成、在日中国留学生への伝道、ウイグル・中央アジア（イスラム圏）への宣教に、ますます力を注いでまいります。また、それと同時に、各地方の教会に赴き、数多く報告会を行いたいと願っています。このような働きを通して、今まで以上に広く諸教会に仕え、ともに世界宣教に励んで参りたいと願っています。今後とも、みなさまのご指導と、ご支援をよろしくお願いします。

日本ペンテコステ協議会総会雑感

日本ペンテコステ協議会 書記 永井 信義



2009年11月24日（火）午後1時～4時まで、8教団から15名が出席して、東京、駒込の日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団理事室を会場に、日本ペンテコステ協議会総会が開かれました。

内村撒母耳議長のあいさつ、永井信義書記によるデボーション（ルカの福音書14章11節）にはじまり、出席者の紹介、前回の議事録の承認の後、以下のような報告なされました。

①中見透副議長から日本プロテスタント宣教150周年記念大会（7月8、9日、横浜、のべ16,000人参加）、プロテスタント宣教150周年記念フェスティバル（10月12、13日、川口、のべ3,500人参加）に関して

②議長から日本伝道会議（9月21～24日、札幌、2,000人参加）に関して
続けて、会計より2009年度会計の報告があり、承認され、任期満了にともなう役員改選が行なわれました。改選に際し、役員に関する規約が確認され、意見が交わされ、検討がなれた後、以下のとおり議長が選出され、他の役員が再任されました。なお、任期は2009年11月から2012年11月の三年間です。

議長： 細井眞師（JAG新理事長）

副議長： 八束和心師／中見透師

書記： 永井信義師

会計： 船津行雄師

さらに 2010 年度日本ペンテコステ協議会活動について話し合われ、以下が計画されました。

①日本ペンテコステ協議会研修会

日 時：2010 年 5 月 25 日（火）11：00～16：00

場 所：日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団神学校チャペル

会 費：一人 2,000 円

プログラム：

11：00～12：00 礼 拝 司 会：八東和心師
説 教：細井眞師

12：00～13：30 昼 食 司 会：永井信義師

13：30～16：00 講 演 司 会：中見透師

テーマ：「21 世紀の最初の十年から学んだこと、
これからの十年に向けての展望」

講 師：佐藤成紀師（45 分＋Q & A）
(日本フォースクエア福音教団)

八東選也師（45 分＋Q & A）
(日本チャーチ オブ ゴッド教団)

② 2010 年度日本ペンテコステ協議会総会

日 時：2010 年 11 月 30 日（火）13：00～16：00

場 所：日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団理事室

JPC ニュースに関しては、第七号は神の家族キリスト教会によって担当され、テーマは「21 世紀の最初の十年から学んだこと、これからの十年に向けての展望」、2010 年 5 月 25 日（火）に行なわれる研修会において配布されることが確認されました。（なお、第八号は日本フォースクエア福音教団、第九号は日本 NTM、第十号は日本ペンテコステ教団のよって担当される予定です。）

また、第 22 回世界ペンテコステ大会が 2010 年 8 月 24～27 日にスウェーデン・ストックホルムで開催されることが報告され、JPC から代表を派遣すること、そのための費用を JPC より 10 万円（上限）支出すること、また、出来るだけ多くの参加者を JPC 加盟教団、グループにから募ることが承認されました。

この他、日本 NTM 三坂正治代表からの提案がなされ、JPC の信仰宣言を承認する教団、教会（JPC、NRA 以外の聖靈派のグループも含む）が一つとなること、世界にある他のペンテコステのグループに対する窓口となることが提案されました。この提案に対しては引き続きそれぞれの教団で協議、検討されることになりました。

最後に 2010 年度予算が会計によって説明され、検討の後、承認されました。今回の総会においても協議のみならず、情報交換など、教団、グループを超えた分かち合いの時が持たれ、実りの多いものであったと感じています。

日本ペンテコステ協議会規約

1) 本会は、名称を『日本ペンテコステ協議会』(Japan Pentecostal Council 略称 JPC) とする。

2) 事務局

本協議会の事務局を日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団本部に置く。

3) 目的

本協議会の目的は、日本におけるペンテコステ信仰の健全な成長と発展を促進するために、ペンテコステの教団及び教団に準ずるグループの指導者・教職者間における交流を深め、情報交換及び相互理解を図り、教職研修を行うことにある。

4) 信仰宣言

本協議会の構成員は、以下の信仰宣言を告白するものとする。

1. わたしたちは、聖書が靈感された、唯一の誤りのない權威ある神の言葉であることを信じる。

2. わたしたちは、父と子と聖靈の三位において永遠に存在される唯一の神を信じる。

3. わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストの神性、処女降誕、罪のない生涯、奇跡、十字架の血による代償的贖罪的犠牲、肉体をもっての復活、父の右の座への高舉、また、力と栄光の中での再臨を信じる。

4. わたしたちは、失われた罪人のためには、みことばと聖靈による新生が不可欠であると信じる。

5. わたしたちは、異言の証拠を伴う聖靈のバプテスマを信じる。

6. わたしたちは、聖靈の今日的働きによる肉体の癒し、および種々の聖靈の賜物を信じる。

7. わたしたちは、聖靈の内在によって清い敬虔な生活が可能となることを信じる。

8. わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストにおける信者の靈的一致を信じる。

9. わたしたちは、聖徒の復活、失われた者の審判、新天新地を信じる。

5) 活動

定期的に会議を開催し、各教団及びグループの指導者・教職者間の交流、意見・情報の交換、研修その他必要な活動を行う。広報誌と機関誌を発行する。

6) 総会

本協議会は最高議決機関として総会を置く。総会は、加盟教団にそれぞれの教会数に応じて割り当てられた数の代議員によって構成する。

50 教会以下 代議員 1 名

51 ~ 100 教会 代議員 2 名

101 教会以上 代議員 3 名

7) 役員

本協議会に議長、副議長、書記、会計を置き、その任期を 3 年とする。役員会は議長によって収集され、定期的に開催する。

8) 経費

本協議会の経費は、加入団体の負担とする。

9) 附則

本規約は、1998 年 5 月 29 日より実施する。この規約の変更は総会の議決を経て実施する。また、2003 年 3 月 25 日に改正された。

日本ペンテコステ協議会 会計報告

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
負担金①	430,0000	総会	8,135
150周年協賛献金②	550,000	役員会	42,085
研修会会費	86,000	研修会	1130312
雑収入	896	献金③	1,000,000
		PWF負担金	46,220
		JPCニュース広告	23,000
		新聞廣告④	75,700
		事務諸費	7,200
小計	1,066,89	小計	1,315,652
前年度繰越金	1,176,929	現在残高	928,173
合計	2,243,825	合計	2,243,825

[献金明細]

	①負担金	②150年献金
日本オープンバイブル教団	30,000円	30,000円
神の家族キリスト教会		20,000円
イエス・キリスト福音の群	(2年分)20,000円	10,000円
単立ペンテコステ教会フェローシップ	40,000円	40,000円
日本チャーチ・オブ・ゴッド教団	50,000円	200,000円
日本ペンテコステ教団	30,000円	20,000円
日本フォースクエア福音教団	20,000円	10,000円
日本ネクスト・タウンズ・ミッション	(2年分)60,000円	40,000円
シオン宣教団	30,000円	30,000円
③プロテスタンント150周年記念大会	500,000円	
プロテスタンント150周年フェスティバル	500,000円	
④クリスチャン新聞：クリスマス特集	35,700円	
リバイバルジャパン：ペンテコステ特集	30,000円	
クリスチャン新聞：150年フェスティバル協賛広告	10,000円	会計 船津行雄

日本ペンテコステ協議会 加盟団体一覧

(各教団代表は、2010年5月現在)

- **日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団** 理事長 細井 真
連絡先 日本AOG教団本部 〒170-0003 東京都豊島区駒込3-15-20
TEL.03-3918-5935 FAX.03-3918-0474
- **日本ネクストタウンズ・ミッション** 代表 三坂 正治
連絡先 松坂キリスト福音教会 〒515-0812 三重県松阪市船江町452
(藤田光康牧師) TEL&FAX.0598-23-9648
- **単立ペンテコステ教会フェローシップ** 代表 中見 透
連絡先 御殿場純福音教会 〒412-0024 静岡県御殿場市東山711-24
TEL.0550-82-2872 FAX.0550-82-7233
- **日本オープンバイブル教団** 代表 菅原 亘
連絡先 神戸キリスト栄光教会 〒653-0845 兵庫県神戸市長田区戸崎通3-9-12
TEL.078-612-5511 FAX.078-624-5513
- **シオン宣教団** 代表 松本 光弘
連絡先 松江福音教会 〒690-0001 島根県松江市東朝日町206-4
TEL&FAX.0852-31-9368
- **イエス・キリスト福音の群** 代表 永井 信義
連絡先 東北中央教会 〒981-3604 宮城県黒川郡大衡村ゴスペルタウン
TEL.022-345-2991 FAX.022-345-2992
- **日本ペンテコステ教団** 代表 榎 義之
連絡先 生駒聖書学院 〒630-0243 奈良県生駒市俵口町951
TEL&FAX.0743-74-7622
- **神の家族キリスト教会** 代表 水野 明廣
連絡先 クリスチャンライフ 〒464-0094 愛知県名古屋市千種区赤坂町4-64
TEL.052-721-7831 FAX.052-721-7625
- **日本フォースクエア福音教団** 総理 佐藤 成紀
連絡先 ホーペチャペル所沢 〒359-1125 埼玉県所沢市南住吉10-8
TEL&FAX.042-922-7716
- **日本チャーチ オブ ゴッド教団** 監督 八束 和心
連絡先 東京ライトハウスチャーチ 〒146-0093 東京都大田区矢口2-1-18
TEL.03-3758-1625 FAX.03-3758-1647



Japan Pentecostal Council News

編集後記

PCニュース第7号は、各教団での『21世紀の最初の10年から学んだ事、これからの10年に向けての展望』について原稿を寄せていただきました。ご協力いただきました教団の諸先生方に、心よりお礼申し上げます。また、JPC事務局のご協力を心より感謝いたします。

皆様の上に主の祝福が豊かにありますよう、お祈りいたします。

(編集担当：神の家族キリスト教会)